

ほのぼの

第70号

令和7年

7月

発行
信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3
TEL.078-732-5209



御恩が身にしみる

前住職

科学技術の驚異的な発展によって、人工知能が人間の脳に代わってこの世界を謳歌しようとしています。その流れの速さにはただ圧倒されるばかりです。しかし社会構造がどんなに変わっても、生活環境がどんどん便利になってきたとしても、人間の心の本質は昔も今も少しも変わることはできません。縄文時代の人も江戸時代の人でも、令和の時代になった今の人も、もちろんこれからどんなに科学技術が発展し人間の生活様式が変わってきても人間の本質が変わることはないのです。科学は人間に便利さを与えるかもしれませんが、人間の本質を変える力はありません。愛欲や名誉・権力、損得勘定に縛られてあくせくする。それが習慣になってしまふ。みんなも同じだ、当たり前のことだと思う毎日の生活です。始めがあれば終わりがある。生まれたら必ず死ぬ身です。逃げても逃げ切れないのに、いつかはその日が来るかもしれないが今日や明日ではない「つもり」で先送りばかりしています。「つもり」は自分勝手

な思い込みです。それに気づかずに「他人ごと」として受け取ってしまう愚かな自分があります。「われや先ひとや先 今日とも知らず 明日とも知らず」と、この世の現実をお知らせ頂いていても「わがこと」としてそのお知らせを受けつけない。私はまだ若いから、あるいは私はまだ元気ハツラツだから、まだ大丈夫という変な理屈です。これは仏さまの仰せより自分の思い込みの方が確かだと判断してしまうからでしょうか。自分の判断は間違いないと確信し行動する。これが本当の自分を見失っている人間の悲しい姿です。

人生は時間という世界を旅しているように八十数年生き続けてきて思うことです。時間は眼に見えませんがわが身の上に現れています。その旅の道中でいろんな出会いがあります。気に入るるものもあり、気に入らないものもあって一喜一憂しますが、帰るところがあつてこそ旅になります。帰る所とは心身ともに安らげる所です。帰る所がなければ旅になりません。ただ流がされているだけです。迷いの世界を行き来するだけで「福は内 鬼は外」といながら苦の世界を離れるこの出来ない生き方です。花が咲くのも花が散るのも人生です。死が問いかけていることは何でしょうか。

作家志賀直哉は「路傍の石」で「たつた一人しかいないけ取ってしまう愚かな自分があります。「われや先ひとや先 今日とも知らず 明日とも知らず」と、この世の現実をお知らせ頂いていても「わがこと」としてそのお知らせを受けつけない。私はまだ若いから、本当にいかさなかつたら、生まれてきた甲斐がないじゃないか」と見事に表現しています。名言です。

一番安らげる世界は、この世では我が家、次の世では阿弥陀様のお淨土です。現に今阿弥陀さまは愛欲と名利から離れられないものを「引き受けた、マカセヨ」と、十劫という計り知れない昔から立ち続けて呼び続けておられます。その呼び声を「南無阿弥陀仏」というのです。

「沈む石 重みのままに乗せられて 渡る船路の安くのどけき」と詠まれお淨土にかえられた念佛者がおられます。淨土真宗は今与えられている一生を「有難い」と頂いて生き抜いていける道を説いています。蓮如上人は、「一人でも行かねばならぬ旅なるを 弥陀にひかれて行くぞ 嬉しき」と詠まれています。報恩感謝は、受けた恩を無駄にしないで生き抜くことです。

御恩が身にしみます。 合掌



第二十四回 信行寺門信徒会定期総会

信行寺 花まつり

四月二十六日(土)に門信徒会定期総会が開催されました。

昨年度の事業報告及び会計報告、今年度の事業計画(案)と予算(案)の報告が行われました。また役員改定の年度にあたり、新役員が選出され参加者一同により承認されました。今年度も皆様の信行寺行事へのご参加・ご協力よろしくお願ひします。

毎年、総会の参加記念品として多田清子様が手作りの焼き物を寄贈していただいております。ありがとうございます。昨年度までは小皿でしたが、今年度は小ぶりのお茶碗で、その年によってデザインが変わり、楽しみです。

ぜひ、来年度の総会もご参加よろしくお願ひします。



毎年信行寺のはす向かいにある保育園の園児さんが花まつりに参加してくれます。今年度は三十六名が参加し、可愛らしい笑顔でいっぱいになりました。甘茶をいただいてから、本堂で門信徒の皆様と一緒に仏教童話の読み聞かせと住職からのお話を聞きました。内容は「思いやり」について、大人も子供も伝わるようなお話でした。地域で子供を育む、そのような気持ちで「花まつり」を今後も続けていきたいと思います。

ご協力いただきました門信徒の皆様方、ありがとうございます。

実家の墓と仏壇

吉谷 洋子

母をお淨土へ送つて二十一年になります。八十六歳まで気丈に一人で暮らしていた母、年々衰えていく様子を感じ、私はできる限り実家に通い、ケアしていました。

平成七年、阪神淡路大震災をきっかけに母を引き取り同居することに。私の家にはすでに仏壇を安置していましたので、母がお守りしてきた実家の仏壇は放置したままになってしまい、心苦しく感じていました。平成十七年、息子が結婚を機に、私の実家に引っ越し、同時に実家の仏壇も継承して、今年で二十年を迎えます。

また、私は実家の墓じまいと両親が別々の場所（父の遺骨はお墓に、母は信行寺の納骨壇に納骨）に納められていたことが気がかりでした。私も年々足腰が弱くなつてきましたので、今行動しなくてはと思い、三年前父の遺骨



をお墓から、母を納骨している信行寺に納めました。

そして、今年の四月から私の実家に住んでいた息子家族と、私の家で同居を始めました。私の家にはすでに仏壇がありますので、実家の仏壇は私の弟が継ぐことになりました。今思い返しますと、五人兄弟の次女で他家に嫁いだ私がなぜ実家の仏壇をと疑問に思うこともあります。ただ私に与えられた運命といただき手を合わせて参りました。

そのような縁がつながり、近年になり信行寺で行われる毎月の法話へ参加しています。私の役目としてこれからは親鸞様の教えを学びつつ、孫へと受け継がれることを願いながら過ごしています。

合掌

誰もいない孤独は、心がシクシク痛みます。誰かといふ孤独は、心がザワザワ騒ぎます。でも、「ひとり」だから自由になれるし、人にやさしくなれます。人間関係は、なればざみしく、あれば煩わしいもの。ほどよい孤独なら、心を「ちょうどよく」してくれます。

「仏の世界と私の世界」

夏季特別法座より③（愛別離苦）

住職

仏陀が最初に説いた教えは四つの真理（四諦）であり、その第一が苦諦です。諦をあきらめると読みますが、單なる放棄ではなく、人生は思うようにならないものだ、ということを明らかに見極めることを意味します。

あることです。なぜなら、それは人間としての言葉ではなく仏様の言葉、つまり眞実の言葉だからです。お経は、漢文なので聞くだけでは意味が分からぬかもしれません、古来よりインドでは、眞実の言葉にはそれ自体に力があるとされています。お経の徳によつて、場の空気が和らいだり、聞いている人や読んでいる人の心がなごみ落ち着いたりするはたらきもあると思います。

インドの仏教聖地であるブッダガヤなどでは、世界中の人々が様々な言語でお経を唱えています。仏様の言葉が響いている場所であり、今もなお仏様がおられるような尊い雰囲気があります。私たちは二千五百年前のお釈迦様に直接会うことはできませんが、その教えを通して仏様に出会つてゐるといえます。

仏さまのことを如来ともいいます。如来とは眞実の世界（如）から私たちのもとへ来たる存在であり、私たちにその真理を伝えてくださったのです。

そして、この仏様の教えに遇うということが尊い仏縁であり、決して当たり前のことはありません。この法座にお参りくださつてゐること、それこそが有難い仏縁をいただいているということなのです。

生まれる・老いる・病む・死ぬという四つの苦しみに加えて、さらに四つの思い通りにならない苦しみがあり、合わせて四苦八苦といいます。その中には愛する人と必ず別れなければならぬという愛別離苦があります。人と出会うということは、同時にいつか別れるという約束を含んでいますし、出会いの喜びの裏には必ず別れがあるのだという眞実を仏教は教えています。しかし、それを本当に受け入れるには時間がかかるものです。大切な家族を亡くされた方に向かつて、どういう言葉をかけてさしあげたらよいのでしょうか。人間が深い悲しみや苦しみの中にあるとき、それを慰める言葉というのは、なかなか見つかるものではありません。そんなときにお経を唱えさせていただくということはとても意味

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、十月の言葉を説明します。



塵^{ちり}が塵^ぢのままに 照らされて ひかり輝^{ひかり}いてる

この言葉は京都府立大学名誉教授、西元宗助先生の著書「念佛者の人生論」の一節です。

書斎に差し込む一条の光の中にたくさんの塵が浮遊しているのが見えて、その塵の一つ一つが光に照らされて金色や銀色にひかり輝いていることに心打たれたという経験から語った言葉だそうです。

十方微塵世界の念佛の衆生をみそなわし
摂取して捨てざれば 阿弥陀となづけたてまつる

数限りないすべての世界の念佛するものを見通され、摂め取つて決してお捨てにならないので、阿弥陀と申し上げる

この「和讃の「微塵」とは数限りないと訳すことがでります。私たちは一人ひとり塵のように小さな世界に生きています。自分の思いにとらわれ、自己中心的な世界は数限りなくあり、阿弥陀さまは広大なお慈悲のはたらきで、そのすべて世界を照らしつくしてくださいます。

この塵が私の姿であると西元先生は受けとられたのです。私たちは例えれば良いことが起つてほしい、悪くならないでほしいと祈り願います。そして、うまくいかないと「神も仏もないものか」という心境になります。しかし、様々な困難にあって苦しみ悩んだお陰で、お念佛は自分に都合のよいことを呼び寄せる手立てではなく、どんなに不都合な境地に立たされてもそれを受容できるよう支えてくださるのがお念佛であることを明らかにしていただいているのです。



日頃の疑問を考えよう

Q

実家の宗派と嫁ぎ先の宗派が異なる場合、どうするべきなのでしょうか。

A

子どもが少ない時代ですので、これからも多くなる課題ですね。

二階に妻方の宗派真言宗の仏壇があり、三階に夫方の宗派浄土真宗の仏壇があり、それのお寺さんにお参りしてもらっている檀家さんがおられます。また、浄土真宗の仏壇でない仏壇に、浄土真宗の過去帳を納めてお参りしてもらっている檀家さんもおられます。仏壇はどちらかの宗派に合わせて、仏壇を一つにするか、もしくは両方の宗派を尊重しあ仏壇を並べることもあるということです。どちらが良い悪いということはありません。家族で話し合い可能な方法を検討されればよいと思います。それぞれの宗派のお寺さんの考え方もありますので相談されるとよいでしょう。

親が亡くなった時、送る側の娘である私と親の宗派・信仰が違う場合、どちらの宗派で葬儀をお願いしたらよ

いか迷っています。自分の判断で亡くなった親が迷つたり、悪いことが起きたりしたらなど思い困っています。まず、生きているご自分の信仰・宗派で葬儀・法要されるのが基本と考えてよいと思います。しかし、生前の信仰や遺言などではつきり故人が意思を示しているのであればそれを大切にするのは言うまでもありません。葬儀や法要の際は、事前に家族で話し合い、双方の信仰・意思を尊重した方法で執り行うことが大切です。

また、亡くなられた方が迷つたり、怒つたりすることはありません。そのように考えるのは生きている人間の迷いの気持ちです。先ほどの仏壇を家に二つ置いたら違う仏さん同士がけんかしませんか?という人もいますが、けんかするのは人間同士で仏様はけんかしません。

縁起（えんぎ）

「縁起が良い・悪い」という意味で普通使われています。しかし、本来の意味はすべてのものには、必ずそれを生んだ因と縁とがあり、それを因縁生起（いんねんしそうき）=縁起というのです。本来は、他多くのものの力、恵み、お蔭を受けて、私たちは生かされているという、仏教の基本的な教えなのです。

Q

親が亡くなった時、送る側の娘である私と親の宗派・

信行寺行事予定とご案内

◆本堂納骨お盆法要

八月十六日（土）午後二時～

◆夏期特別法座

八月十八日（月）十一時～十五時

信行寺本堂・礼拝堂にて、昼食をはさんで行います。ご希望の方はお寺に問い合わせの上、申し込み下さい。

◆秋の彼岸法要

九月二十七日（土）午後一時～住職
二十八日（日）午後一時～前住職

◆西大谷納骨参拝

十月十九日（日）

納骨・参拝を希望される方は、バスで一緒いたしますので、早めにお寺に問い合わせ、申し込み下さい。

編集委員より

ジユズダマ（数珠玉）水辺に咲くイネ科の植物

ガラス質の光沢のある実をつけます。

数珠を作るのにピッタリだったので「ジユズダマ」と名付けられました。

私が子供の頃、この実を集めてお手玉や数珠を作つて遊んでいました。

花言葉は（祈り）や（恩恵）



ホトケノザ（仏の座）道端に咲くシソ科の植物

春に紫がかかったピンク色の花を咲かせます。花の下の葉っぱが、ほとけ様が座っている蓮華座に似ていることから「仏の座」と名付けられました。



花言葉は（調和）や（輝く心）、蓮華座に座るほとけ様の姿や悟りの心をイメージして付けられたようです。

野辺に咲く小さな植物にほとけ様の姿を思うのは、昔の日本では仏の存在が今よりずっと身近に有ったことでしょう。

多田 清子